

本康宏史著

『軍都の慰霊空間』

——国民統合と戦死者たち——

菅 浩 二

著者の本康氏は、石川県立歴史博物館学芸員として地元・金沢の歴史研究に従事すると共に、近現代史に対する問題関心を日本・東アジアへと展開してゐる方である。本書は、氏が一九九〇年代以降に発表した論考を柱に、平成十四年に刊行されてゐる。

翌平成十五年には、国立歴史民俗博物館より共同研究成果報告書として『近現代の戦争に関する記念碑』が刊行されてゐる。本康氏は同博物館における、これら一連の近現代の戦争をめぐる共同研究にも参加してゐる。「あとがき」等によれば、本書は氏の、城下町から軍事都市への変遷といふ金沢への都市史的関心から出発し、この国立歴史民俗博物館の共同研究や、中京大学の檜山幸夫氏らによる台湾

総督府文書目録編纂への参加を通じ視角を拡げた成果のやうである。この視角の拡大は、内容的には表題にも見られる「軍都」といふ概念設定により、金沢・石川県下の事例と他の都市・地域との「比較軍都論」への問題意識の展開に反映してゐる。

更にかうした展開から、本書では「慰霊空間」といふ視点に関はつては、陸軍墓地、招魂社・護国神社、銅像型慰霊碑、忠魂碑、忠霊塔等実に多くの事例を、都市の機能的発展や人々の動向、民俗信仰と「軍国信仰」にも注目する事で幅広く対象として論じてゐる。また本書は、北白川宮能久親王の奉斎、神紋の制定を軸に、台湾神社創建過程にも一章を割いてゐる。能久親王は日清戦争停戦後に、台湾接收のため派遣された近衛師団司令官として、現地武装勢力以上に猛威を振るつた風土病により薨去された皇族軍人である。ともあれ、主題に関はる史実の、史料に即した地道かつ幅広い検証といふ点で、本書は着実な歴史学的研究を積み重ねた成果であるといへよう。

ところで、評者は宗教学を専攻してをり、特に近代国家・ナショナルリズムと宗教の關係に関心を寄せてゐる。本書より後の出版であるが、台湾神社については評者も、拙著『日本統治下の海外神社―朝鮮神宮・台湾神社と祭神』（弘文堂）に詳述した。特に本書と関はる論題としては、「輪王寺宮」

として戊辰戦争当時に列藩同盟主となられた前半生をも含め、能久親王の数奇なご生涯が現代の「日本武尊」として明治中期の日本社会に与へた印象について、些かの考察を加へた。しかし評者は元來歴史学の徒ではなく、軍事の問題に特に注目してゐる訳でもない。その意味で評者は、本書の大部分を占める関連史実の指摘に関しては、右の台湾神社の問題を除けばほぼ、先行研究や史料に即して批評を行ふほどの知識を持たず、教へられる事のみが多かつた。従つて本書に対する評者の視座は、制限されたものでしかあり得ない事をまづ断つた上で、所感を述べたいと思ふ。

本書の内容は以下の通りである。

序論 「慰霊」の場をめぐる――軍事都市と死のトポス

I 「軍都」論と「慰霊空間」

一 「軍都」論

二 「城下町」から「軍都」へ

三 「軍都」における「慰霊空間」の諸相

II 「招魂」の空間

一 招魂社の創設と招魂祭

二 明治記念標の建設

三 招魂社の変遷

四 護国神社の創設と展開

補論 台湾神社の創建

III 「慰霊」のコスモロジー

一 陸軍墓地の創設と展開

二 忠霊塔及び忠魂堂建設運動

三 「慰霊空間」と民衆意識

本書刊行より既に五年余を経てをり、この間に、本書をも踏まへた学術各方面の問題意識の深化も進んだと思はれる。特に平成十三年以降の靖国神社への首相参拝、同年の「追悼・平和祈念のための記念碑等施設の在り方を考える懇談会」の発足等もあり、本書刊行に前後する政治・経済・宗教界の動向や国際情勢とも関連して、学術方面のみならず商業媒体等でも戦没者と慰霊・追悼をめぐる論議が盛んに行はれたのは周知の通りである。本書を含め、国内での近年のかうした動向については、既に藤田大誠氏が「日本における慰霊・追悼・顕彰研究の現状と課題」(『神社本庁教学研究所紀要』第十二号 平成十九年三月 所収)として網羅的にまとめてをり、参考になる。またいはゆる Yasukuni Issue や War Memorial に関する日本社会の動向は、当然ながら海外の研究者・言論人も注目する所となつてをり、評者が現在滞在する米国でも、東アジア・日本関連研究者による個人や共同での研究が行はれてゐる。かうした国内外の研究動向の中で、今現在の評者の問題意識は「国家神道」概念の有効性と限界性を、学術的に見

究めることにある。元来この概念は、基本的には政策上の必要性から、帰納論的な包括的範疇として成立してゐる。平たく言へば、行政上の都合により、ある範囲の現象を大まかに捉へるために想定され、そのやうに名づけられた所に始まる。当然、無内容な概念ではない。しかしながらその包含する処は、戦後の諸研究の成果により余りにも肥大化した。皮肉にもその結果、文脈によつてはこの「国家神道」概念を用ゐる事自体が、ある種の信念、読者側の予断的理解に寄りかかつた循環論法を呼び込む事態が生じた。言ひ換へれば現状では、「国家神道」の語を用ゐる用ゐないに關はず、この包括的範疇を想定した演繹が、意見の異なる者同士の対話が不可能な、閉塞状況を作り出してゐる事を意味する。

このやうな閉塞状況は、ある人々にとつては既存の「陣営」内部での政治的発言力を強めるには都合が良いかも知れない。現実に、近年も「靖国問題」について、著者が単に自分の視点を略述した書籍が広く流布する現象も起きているやうだ。だがそもそも、史実の検証と、その相互関連性の検討に立脚するといふ当然の学術的作法にも至らず、「他者」との邂逅その物を拒否した（有体にいへば知的誠実に欠けた）この種の著作物が、各「陣営」その物の再規定を迫る迫力に欠けてゐるのは当然である。その一方で、

この閉塞状況を破るべく「陣営」を越え出た議論の共通基盤を求める知的努力、及びその基盤づくりの為の史料の探求・史実の検証などの作業も、地道ながら続けられてゐる。これらの地道な営為は、それに従事する人々の知的誠実さを証明するものである。そして本書はこの「地道な営為」のうち、史実の検証に向けての誠実な努力として評価されるべき成果であらう。だが反面、右のやうな評者の問題意識より見れば、本書はその参考史料・文献の膨大さ、史実の緻密な指摘とは裏腹に、全体の論旨を補強するために用ゐられてゐる諸概念に、見えにくい点が非常に多い。

「国民統合」と「戦死者」の具体的扱ひ方の関連性を、近代史上の現象を追ひつつ検証することは、副題にもある通り本書の主題のひとつであらう。具体的には、戦没者の靈魂、即ち共同体にとつてのいはば〈不在の存在〉への対応が、「国民」の創出と動員の過程でどのやうな役割を果たしたのか。本書の基盤には、具体的な「慰霊空間」の成立と構成に結晶したこの過程を考察する、との視点があると思はれる。特にこの点では、本書は「慰霊空間」の景観・位相の考察に加へ、神道史や民俗学的靈魂観にも視野を及ぼし、単なる史実の指摘以上の奥行きを示してゐる。一方で、著者は「国家神道」にも関心が強いやうだが、この点で評者としてはまづ以て、稀ながら本書の要所に登場する

「国家神道」の語が一体何を意味してゐるのか、大変気になる。本書の序論(二頁)に「国家神道の強い影響下にあった戦前期の日本にあつては」の表現があり、最終章(三〇六頁)もこれとほぼ同じ表現で始まつてゐる。また本書全体の終結部に当たる三四四頁に「軍隊を軸とした「祈願」と「慰霊」の展開、すなわち国家神道の浸透は：都市の民衆を総力戦体制の枠に再編成していった」とある。本書も影響を受けてゐると見られる村上重良氏の「国家神道」論に典型的な循環論法は、初めに広範囲な包括概念「国家神道」を立てて置きながら、その包括概念の具体的展開として個別内容の歴史を説明し、包括概念の「完成」によりその歴史が完結する(但し現代の視点からの総合的包括概念なのだから、論理的には当然、初めから「完成」してゐる)といふものである。著者も同様の論理構造で、本書の歴史記述全体で、所与の包括概念たる「国家神道」の内容の一端を示す、と考へてゐるのであらうか。であれば、本書の記述が多くての史実を指摘してゐても、否、多くの史実を含めば含むほど、皮肉にもここから何かを「国家神道」の問題として演繹しようとする事が、上述の如き不毛な循環論法に通じ、結果的に考察の不徹底、閉塞状況を招く。この危険性には、読者も十分留意すべきである。

「国民」の創出・動員と近現代日本の戦争の関わりにつ

いては、評者の観点からは、ごく大まかには国民国家創出過程での内戦(戊辰・西南戦争)、列強に伍する過程での対外戦争(日清・日露戦争)、そして既存の世界秩序との対決を掲げた総力戦(大東亜戦争)の段階が想定できる。本書の考察も、さうした諸段階に対応した「民衆統合」、言ひ換へれば「統合」により「民衆」から「国民」が創り出されて行く過程を、個々の史実から丹念に読み取らうとしてゐる。その姿勢自体は評価できるが、ではそれらの諸段階を通じて、本書の随所に登場する「民衆」とは何だらうか。政治イデオロギー性を帯びた「国民」に対する価値中立的な所与の人間集団として「民衆」を想定し、それを右のやうな諸段階を通じた実体として措置してゐるのだらうか。しかし、従来「民衆史」研究の問題設定を、著者の視点からの説明を欠いたまま援用してゐるとすれば、それは余りに安易ではあるまいか。

なぜなら、この「民衆」自体が既に、「国民」同様に何らかの「我ら」といふ意識の思弁的拡大物だからである。評者は、国家行為としての戦争、そしてその結果「他者」によつて命を奪はれた負の存在「戦没者」を「我ら」のものとして捉へる段階で、既に「民衆」から「国民」への筋道は用意されてゐる、と考へる。この場合「我ら」は、直接の近親者、地縁・血縁等の生活共同性から、本書が注目してゐ

る都市や軍隊、そして「階級」や国家、ひいては「人類」「被造物」まで、種々の単位を取り得る。従つてこの意味で「統合」について考へるならば、「我ら」といふ意識が常に、何らかの「他者（たち）」との相互関係により成立する事実には立脚する必要がある。ここで為すべきはむしろ、当初は個別の「我ら」の外側にあり、「我ら」を戦争へ動員する近代的「国家」なる枠組が、徐々に「我ら」と一体化して行く動態的過程を、「慰霊空間」の個々の歴史の連関性の中に読み込むことであつたと思ふ。

この点では「国家」の拡大により、新たに異民族をも「我ら」の中へと「統合」して行く過程として、対外戦争により獲得した植民地である台湾の事例に注目しようとした、著者の意図その物は理解できる。しかしながら、本書では第Ⅱ部に於いて「日本武尊」と「天皇の軍隊」といふ一節を設けるなど日本武尊への注目が見られるにも関はらず、能久親王に日本武尊が重ねられた事が、台湾神社創建の原動力のひとつである事実が、全く見落とされてゐるのは惜しまれる。更にこの点とも関はつて、本書は祭神としての能久親王について、植民地台湾における「天皇イメージ」の「ミニマムな表徴」として事足りりとする、極めて皮相な見解に留まつてゐる。異民族統治の守護神としての性格に投影されて行く、その重層的な象徴性には全く視線

を及ぼしてはゐない。

「銅像化」や日本武尊が象徴するものへの考察も含めて、皇族の御存在・御生涯が、天皇御自身と共に「天皇イメージ」を形成するとの論旨は理解できる。だが、ではその「イメージ」とは何なのか。そして近代的な「天皇イメージ」なる物に投影されてゐるものは、「我ら」の何であり得、何であり得ないのか。近代日本にあつては明らかに「国民統合」と戦死者たち」の関はりの極限に位置するであらう、この「イメージ」の象徴性と「慰霊空間」の社会的関係性については、当然、本書の主題「統合」の問題として論じられるべきである。しかし本書ではこの点についても、残念ながらただ史実と先行研究が並んでゐるだけで、独自の考察としては殆ど見るべき点がない。この辺りにも本書には、不用意に「国家神道」概念の包括性を史的前提とする事がもたらす、循環的論理構造の影響が見られるやうに思はれる。（なほ「銅像化」に関しては、本書より後になるが、津城寛文氏が「天皇の銅像―物質化のためらい」(『公共宗教』の光と影』春秋社 所収)の中で、天皇の民衆・国民の視線の前への「現われ方」の点から「近代と葛藤する古代的な祭司―王」といふ視点で、興味深い考察をしてゐる。)

この他、本書は昭和十四年の護国神社の創設と展開、及び同時期の忠霊塔建設運動などの経緯についても、多くの

史料を用ゐて記述してゐる。著者は護国神社と忠霊塔、両者の「微妙な関係」(二九一頁)を認識してゐる。それにも拘らず、忠霊塔建設に積極的な仏教界と、靖国神社・護国神社の意義を薄めるものと見て消極的な神社界の確執が、以後大東亜戦時中まで続く、いはゆる「神仏抗争」については触れてゐない。本書の主題からすれば、「国民統合と戦死者」に直接関はる宗教間の主導権を、また死生観をめぐる論争として、この「抗争」には注目すべきではなかつたかと思はれる。まさか「国家神道」の語の前に、問題意識がかき消されたのではあるまいが、考察の不徹底はここでも否めないだらう。

評者の個人的な関心に従つてやや辛口の批評を行つたが、ここで述べたやうな諸々の問題意識は、いづれもこの分野における近年の学術的深化に評者が触発を受けて持ち得たものである。その意味では評者の批判自体が、本書が果たした業績の一端に負つてゐる、といふ、ある種の「循環」構造がここにもあるかも知れない。ともあれ初めに述べた通り、本書は、主題に関連する史実の指摘といふ点では大きな成果を挙げてをり、豊富な註・参考文献は、関連史料を求める際の手引にもなる。この分野の研究者にとつて、必携の書である事は間違ひないだらう。

(吉川弘文館、平成十四年二月、A5判、三五八頁、本

体八〇〇〇円)

(ハーバード大学世界宗教学センター客員研究員)